

深川女房

小栗風葉

「日本の文学 77 名作集 (一)」
中央公論社

1970 (昭和45) 年 7 月 5 日初版発行

1971 (昭和46) 年 4 月30日再版

初出 「新小説」

1905 (明治38) 年 3 月

入力 川山 隆

校正 土屋 隆

2007年 2 月13日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校
正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深川八幡前の小奇麗な鳥屋の二階に、間鴨か何かをジワジワ言わせながら、水昆焔を真中に男女の差向い。男は色の黒い苦み走った、骨組の岩畳な二十七八の若者で、花色裏の盲縞の着物に、同じ盲縞の羽織の襟を洩れて、印譜散らしの渋い緞子の裏、一本筋の幅の詰まった紺博多の帯に鉄鎖を絡ませて、胡座を掻いた虚脛の溢み出るのを気にしては、着物の裾でくるみるみ喋っている。

女は二十二三でもあろうか、目鼻立ちのバラリとした、色の白い愛嬌のある円顔、髪を太輪の銀杏返しに結って、伊勢崎の襟のかかった着物に、黒縹子と変り八反の昼夜帯、米琉の羽織を少し抜き衣紋に被っている。

男はキュウと盃を干して、「さあお光さん、一つ上げよう」

「まあ私は……それよりもお酌しましょう」

「おっと、零れる零れる。何しろこうしてお光さんのお酌で飲むのも三年振りだからな。あれはいつだったつけ、何でも俺が船へ乗り込む二三日前だった、お前のところへ暇乞いに行った

ら、お前の父が恐ろしく景氣つけてくれて、そら、白痘痕のある何とかいう清元の師匠が来るやら、夜一夜大騒ぎをやらかしたあげく、父がしまいにステテコを踊り出した。ね、酔ってるものだからヒヨロヒヨロして、あの大きな体を三味線の上へ尻餅突いて、三味線の棹は折れる、清元の師匠はいい年して泣き出す、あの時の様子たらなかつたぜ、俺は今だに目に残ってる……だが、あんな元氣のよかつた父が死んだとは、何だか夢のようで本当にやらねえ、一体何病氣で死んだんだい？」

「病氣も何もありやしないのさ。いつもの通り晩に一口飲んで、いい機嫌になって鼻唄か何かで湯へ出かけると、じき湯屋の上さんが飛んで来て、お前さんとこの阿父さんがこれこれだと言うから、びつくりして行つて見ると、阿父さんは湯槽に捉まつたままもう冷たくなつてたのさ。やつぱり卒中で……お酒を飲んで湯へ入るのはごくいけないんだつてね」

「そうかなあ、酒呑みは氣をつけることだ。そのくせ俺は湯が好きでね」

「そうね。金さんは元から熱湯好きだったね。だけど、酔つてる時だけは氣をおつけよ、人事じゃないんだよ」

「大きに！ まだどうも死ぬにや早いからな」

「当り前さ、今から死んでたまるものかね。そう言えば、お前さん今年幾歳になつたんだつて

ね?」

「九さ、たまらねえじゃねえか、来年はもう三十面つら下げるんだ。お光さんは今年三だね?」

「ええ、よく覚えててね」と女はニッコリする。

「そりゃ覚えてなくって!」と男もニッコリしたが、「何しろまあいいところで出逢でつたよ、やっぱり八幡様のお引合せとでも言うんだらう。実はね、横浜はまからこちらへ来るとすぐ佃つくだへ行つて、お光さんの元の家を訪ねたんだ。すると、とうにもうどこへか行つてしまつて、隣近所でも分らないと言うものだから、俺はどんなにガツカリしたか知れやしねえ」

「私やまた、鳥居のところでお光さんお光さんと呼ぶから、誰かと思つてヒョイと振り返つて見ると、金さんだもの、本当にびつくらしたわ。一体まあ東京を経たつてから今日までどうしておいでだったの?」

「さあ、いろいろ談はなせば長いけれど……あれからすぐ船へ乗り込んで横浜を出て、翌年あくるとしの春から夏へ、主に朝鮮の周囲いまわりで膾炙おとせ獣おを逐おつていたのさ。ところが、あの年は馬鹿にまた猟ががなく、これじゃとてもしようがないからというので、船長始め皆が相談の上、一番度胸すを据すえて露西亞ろしやの方へ密猟と出かけたんだ。すると、運の悪い時は悪いもので、コマンドルスキーといふところでバツタリ出合でっくわしたのが向うの軍艦! こっちはただの帆前船で、逃げも手向いも出来

たものじゃねえ、いきなり船は抑えられてしまふし、乗ってる者は残らず珠数繋ぎにされて、向うの政府の獵船が出張って来るまで、その土人へ一同お預けさ」

「まあ！ さぞねえ。それじゃ便りのなかったのも無理はないね」

「便りがしたくたつて、便りのしようがねえんだもの」

女は頷いて、「それからどうしたの？」

「それから、間もなく露西亜の獵船というのがやって来たんだ。ところが、向うの船は積荷が一杯で、今度は載ッけて行くわけに行かねえからこの次まで待てと言うんで、俺たちはそのま
ま島へ残されたんだ。今になると残されてよかつたので、あの時連れて行かれようものなら、
浦塩かどこの牢で今ごろはこッぴどい目に遭つてる奴さ。すると、そのうちに今度の戦争が
押ッ始まったものだから、もう露西亜も糞もあつたものじゃねえ、日本の獵船はドシドシコマ
ンドルスキー辺へもやって来るといふ始末で、島から救い出されると、俺はすぐその船で今日
まで稼いで来たんだが……考えて見りゃ運がよかつたんだ。辞も何にも分らねえ髭ムクチャの
土人の中で、食物もろくろく与われなかつた時にや、こうして日本へ帰って無事にお光さんに
逢おうとは、全く夢にも思わなかつたよ」

「そうだろうともねえ、察するよ！ 私も——縁起でもないけど——何しろお前さんの便りは

なし、それにあちこち聞き合わして見ると、てんで船の行方ゆくえからして分らないというんだもの。ああ気の毒に！ 金さんはそれじゃ船ぐるみ吹き流されるか、それとも沖中で沈んでしまつて、今ごろは魚の餌食えしきになつておいでだろうとそう思つてね、私や弔供養とくようをしないばかりでいたんだよ。本当にまあ、それでもよく無事で帰つておいでだったね」

男はこの時氣のついたように徳利を揮ふつて見て、「ははは、とんだ滅入めいつた話になつて、酒も何も冷たくなつてしまつた。お光さん、ちつともお前やらねえじゃねえか、遠慮をしてねえでセッセと馬食ばくついでくれねえじゃいけねえ」と言いながら、手を叩いて女中を呼び、「おい姐ねえさん、銚子ちやうしの代りを……熱く頼むよ。それから間鴨あいをもう二人前、雑物ざつものを交せてね」

で、間もなくお詠あつちえが来る。男は徳利を取り揚げて、「さあ、熱いのが来たから、一つ注つぐう」

女も今度は素直に盃を受けて、「そうですか、じゃ一つ頂戴まねしましょう。チヨンボリ、ほんの真ま似ねだけにしといておくんなさいよ」

「何なにだいな卑怯ひせつなことを、お前まへも父ちやんの子じゃねえか」

「だって、女の飲のんだくれはあんまりドツとしないからね」

「なあに、人はドツとしなくつても、俺おれはちよいとこう、目の縁はしを赤くして端唄はうたでも転ころがすよ

うなのが好きだ」

「おや、御馳走様！ どこかのお惚気なんだね」

「そうおい、逸らかしちやいけねえ。俺は真剣事でお光さんに言ってるんだぜ」

「私に言ってるのならお生憎様。そりやお酒を飲んだら赤くはなろうけど、端唄を転がすなんて、そんな意気な真似はお光さんの格にないんだから」

「あんまりそうでもなからうぜ。忘れもしねえが、何でもあれは清元の師匠の花見の時だっけ、飛鳥山の茶店で多勢芸者や落語家を連れたいちまき、向うがからかい半分に無理強いした酒に、お前は恐ろしく酔ってしまつて、それでも負けん気で『江戸桜』か何か唄つて皆をアツと言わせた、ね、覚えてるだろう」

「そうそう、そんなことがあつたっけね。あれはこうと、私が十九の春だっけ。あのころは随分私もお転婆だつたが……ああ、もうあのころのような面白いことは二度とないねえ！」としみみ言つて、女はそぞろに過ぎ去つた自分の春を懐かしむよう。

「ははは、何だか馬鹿に年寄り染みたことを言うじゃねえか。お光さんなんざまだ女の盛りなんだもの、本当の面白いことはこれからさ」

「いいえ、もうこんな年になつちやだめだよ。そりや男はね、三十が四十でも氣の持ちよう一

つで、いつまでも若くていられるけど、女は全く意気地がありませんよ。第一、傍はたがそういつまでも若い気じゃ置かせないからね。だから意気地がないというより、女はつまり男に比べて割が悪いのさね」

「いけねえいけねえ、じきどうも話が理に落ちて……」と男は手酌でグツと一つ干して、「時に、聞くのを忘れてたが、お光さんはそれで、今はどこにいるの、家は？」

「私？」女はちよつと言ひ渋つたが、「今いるところはやっぱり深川なの」

「深川は分つてるが、町は？」

「町は清住町、永代えいたいのじき傍そばさ」

「そうか、永代の傍で清住町というんだね、遊びに行くよ。番地は何番地だい？」

「清住町の二十四番地。吉田って聞きゃじき分るわ」

「吉田？ 何だい、その吉田でえのは？」

「私の亭主の苗字みょうじさ」と言つて、女は無理に笑顔を作る。

「え!？」と男は思わず目を見張つて顔を見つめたが、苦笑いをして、「笑談じょうだんだろう?」

「あら、本当だよ。去年の秋嫁かたづいて……金さんも知つておいでだろう、以前やつぱり佃つくだにいた魚屋の吉新、吉田新造つて……」

「吉田新造！ 知つてるとも。じゃお光さん、本当かい？」

「はあ」と術なげに頷く。

「ふむ！」とばかり、男は酔いも何も醒め果ててしまったような顔をして、両手を組んで差し俯いたまま辞もない。

女もしばらくは言い出づる辞もなく、ただ愁そうに首をば垂れて、自分の膝の吹綿を弄つていたが、「ねえ金さん、お前さんもこれを聞いたら、さぞ気貧い女だと思いだろうが……何しろ阿父さんには死なれてしまふし、便りにしていたお前さんはさつき言う通りで、どうも十中八九はこの世においてじゃなさそうに思われるし、と言ってほかに力になるような親内らしい親内もないものだから、私一人ぼっちで本当に困ってしまったんだよ。そこへちやうど吉新の方から話があつて、私も最初は煮えきらない返事をしていたんだけど、もう年が年だからつて、傍でヤイヤ言うものだから、私もとうとうその気になつてしまったようなわけだね……金さん、お前さんも何だわ——今さらそう言つたつてしようがないけど——せめて無事だというだけでも便りをしておくれたら……もつとも話のようじゃそれもできなかつたか知らないが……」

「そうさ、それが出来るようなら文句はねえんだが……」と遺瀬なさに面を挙げて、「そり

やね、お光さんが亭主を持つとうとうどうしようと、俺がかれこれ言う筋はねえ。ねえけれど……お光さん、お前も俺の胸の内は察してくれるだろう」

「ええ、そりゃもうね」

「せめて何か、口約束でもした中と言うならだが、元々そんなことのあるわけじゃなし、それにお前の話を聞いて見りゃ一々もつともで、どうもこれ、怨^{うら}みたくも怨^{うら}みようがねえ……けれど、俺は理屈はなしに怨めしいんで……」

「……………」

「何もお光さんで見りゃそんな気があつて言つたんじゃあるめえが、俺がいよいよ横^は濱^まへ立つという朝、出がけにお前の家へ寄つたら、お前が繰り返し待つてると言つてくれた、それを俺はどんなに胸に刻んで出かけたろう！ けれど、考えて見りゃ誰だつてそのくらいのことはお世辞に言うことで……」

「金さん！」と女は引手^{ひったく}繰るように言つて、「お世辞なんてあんまりだよ！ 私ゃそんなつもりじゃない。そりゃなるほど、口へ出しては別にこうと言つたことはないけれど、私ゃお前さんの心も知つていたし、私の心もお前さんは知つておくれだつたらう。それなのに、今さらそんな……」

「まあいいやな」と男は潔く首を掉つて、「お互いに小児の時から知合いで、気心だつて知つて知つて知り抜いていながら、それが妙な羽目でこうなるというのは、よくよく縁がなかつたんだらう！ いや、こうなつて見るとちと面目ねえ、亭主持ちとは知らずに小厭らしいことを聞かせて。お光さん、どうか悪く思わねえでね、これはこの場限り水に流しておくんなよ」

「どうもお前さんが、そう捌けて言つておくれたと、私はなおと済まないようで……」

「何がお光さんに済まねえことがあるものか、済まねえのは俺よ。だが、そんなことはまあどうでもいいとして、この後もやっぱりこれまで通り付き合つちゃくれるだらうね？」

「なぜ？ 当り前じゃないかね？」

「だって、亭主がありや、もう野郎の友達なんざ要らねえかと思つてさ」と寂しい薄笑いをする。

「はばかりさま！ そんな私じゃありませんよ」と女はむきになつて言つたが、そのまま何やらジツと考え込んでしまった。

男はわざと元氣よく、「そんなら俺も安心だ、お前とこの新さんとはまんざら知らねえ中でもねえし、これを縁に一層また近しくしてもらおう。知つての通り、俺も親内と言つちや一人もねえのだから、どうかまあ親類付合いというようなことにね……そこで、改めて一つ上げよ

う」

差さるる盃を女は黙つて受けたが、一口附けると下に置いて、口元を襦袢じゅばんの袖で拭ぬぐいながら、「金さん、一つ相談があるが聞いておくれでないか？」

「ひどく改まったね。何だい、相談てえのは？」

「ほかではないがね、お前さんに一人お上さんを取り持とうと思うんだが……」

「女房を？ そうさね……何だか異あつりきに聞えるじゃねえか、早く一人押ッ付けなきや寢覚ねざめが悪いとも言うのかい？」

「おや、とんだ廻まわり気きさ。私はね、お前さんが親類付合まわいとお言いいだつたから、それからふと考かえたんだが……お前さんだつてどうせ貫つらわなきやならないんだから、一人よさそうなのを世話せわして上げたら私たちが仲人なこうどというので、この後も何ぞにつけ相談対手あいてにもなれようと思つて、それで私はそう言つて見たんだが……どうだね、私たちの仲人じゃ気に入いらないかね？」

「なに、そんなことはねえ、新さんとお光さんの仲人なら俺にや過ぎてらあ。だが、仲人はいが……」と言いい半まして、そのまま伏目ふしめになつて黙もつてしまふ。

「仲人はいが、どうしたのさ？」

男は目を輝かせながら、「どうだろう？ お光さん」

「え？」

「せめてお光さんの影法師ぐらいのがあるだろうか？」

「何だね、この人は！ 私や真面目で談はなしてるんだよ」

「俺も真面目さ」

「まあ笑談は措おいて、きつとこれから金さんの気に入ろうというのを世話するから、私に一つお任せなね」

「そりゃ任せようとも、お前に似てさえいりゃ俺の気に入るんだから」

「およしよ、からかうのは。私のようなこんな気の利かないお多福でなしに、縹きりよう致なら氣立てなら、どこへ出しても恥かしくないのを搜して上げるから、ね、今から楽しみにして待つておいでな」

「まあその気で待つていようよ。おいお光さん、談してばかりいて一向やらねえじゃねえか。どうだい酒が迷惑なら飯をそう言おう」

「いえ、もうお飯ごはんも何もたくさん。さつきから遠慮なしに戴いて、お腹が一杯だから」
「だって、一膳ぐらいいいだろう？ 俺も付き合う」

「お前さんはまだお酒じゃないか、私や本当にたくさんなの。それにあんまり遅くなっても

……」

「なるほど、違えねえ、新さんが案じてるだろう」

「癩しやくをお言いでないよ！ だが、全くのことがね、この節内のは体が悪くて寝てるものだから
ね」

「そうか、そいつはいけねえな」

永代橋傍の清住町というちよつとした町に、代物の新しいのと上さんの世辞のよいのとで、その界限に知られた吉新という魚屋がある。元は佃島の者で、ここへ引越して来てからまだ二年ばかりにもならぬのであるが、近ごろメッキリ得意も附いて、近辺の大店向きやお屋敷方へも手広く出入りをするので、町内の同業者からはとんだ商売敵にされて、何のあいつが吉新なものか、煮ても焼いても食えねえ悪新だなどと蔭口を叩く者もある。

けれど、その実吉新の主の新造というのは、そんな悪でもなければ善人でもない平凡な商人で、わずかの間にそうして店をし出したのも、単に資本が充分なという点と、それに連れてよそよりは代物をよく値を安くしたからに過ぎぬので、親父は新五郎といって、今でもやっぱり佃島に同じ吉新という名で魚屋をしていて、これは佃での大店である。

で、店は繁昌するし、後立てはシツカリしているし、おまけに上さんは美しいし、このまま行けば天下泰平吉新万歳であるが、さてどうも娑婆のことはそう一から十まで註文通りには填まらぬもので、この二三箇月前から主はブラブラ病について、最初は医者も流行感冒の重いく

らに見立てていたのが、近ごろようよう腎臓病と分つた。もつとも、四五年前にも同じ病気に罹かかつたのであるが、その時は急発であるとともに三週間ばかりで全治したが、今度のはジリジリと来て、長い代りには前ほどに苦しまぬので、下腹や腰の周囲まわりがズキズキ疼うずくのさえ辛抱すれば、折々熱が出たり寒気がしたりするくらいに過ぎぬから、今のところではただもう暢のんき気に寝たり起きたりしている。帳場と店とは小僧対手に上さんが取り仕切つて、買出しや得意廻りわかいしゆは親父の方から一人若衆をよこして、それに一切任せてある。

今日けふは不漁しけで代物が少なかつたためか、店はもう小魚一匹残らず奇麗に片づいて、浅葱あさぎの鯉口こいぐちを着た若衆はセッセと盤台を洗っていると、小僧は組板まいたの上の刺身の屑くずをペロペロ摘つまみながら、竹箒たけぼきの短いので板の間を掃除している。

若衆は盤台を一枚洗い揚げたところで、ふと小僧を見返つて、「三公、お上さんはいつごろ出かけたんだい？」

「そうだね、何でも為さん（若衆の名）が得意廻りわかいしゆに出るとじきだったよ」

「それにしちや馬鹿に遅いじゃねいか。何だかこの節お上さんの様子が変だぜ、店の方も打遣うちぢやらかしにして、いやにソワソワ出歩いてばかりいるが……」

「なあにね、今日は不漁しけで店が閑ひまだから、こんな時でなけりゃゆつくり用足しにも出られない

「つて」

「へ！ 何の用足しだか知れたものじゃねえ、こう三公、いいことを手前に訓おしえてやらあ、今度お上さんが出かけるだったらな、どうもお楽しみでございますねって、そう言つて見や、鼻薬の十銭や二十銭黙もつてくれるから」

「おいらはそんなことを言わなかつて、お上さんにやしよつちゆう小使こしいを貰もらつてらあ」

「ちよ！ 芝居ひ気のねえ野郎ひとりこだな」と独言ひとりごとちて、若衆わかしゅは次の盤台ばんだいを洗い出す。

しばらくするとまた、「こう三公」

「何だね？ 為さん」

「そら、こないだお上さんのところへ訪ねて来た男があるだろう……」

「為さんはまたお上さんのことばかり言つてるね」

「ふざけるない！ こいつ悪く気を廻しやがって……なあ、こないだ金之助かねのすけがえ男が訪ねて来たろう」

「うむ、海に棲すんでる馬うまだつて、あの大きな牙きばを親方おやぢのところへ土産みやげに持つて来たあの人ひとだろう」

「あいつさ、あいつはあれき限りもう来ねえのか？」

「来ねえようだよ」

「偽つけ！ 来ねえことがあるものか」

「じゃ、為さん見たのか？」

「俺は手前、毎日得意廻りに出ていねえんだもの、見やしねえけれど大抵当りはつかあ」

「そうかね」

「そうとも。きつと何だろう、店先へ買物にでも来たような風をして、親方の気のつかねえよ
うに、何かボソボソおさんと内密話をしちや、帰って行くんだらう。なあ、どうだ三公、当
つたらう？」

小僧は怪訝な顔をして、「俺はそんなところを見たことはねえよ。だって、あれからまだ一度も
来たのは知らねえもの」

「本当か？」

「ああ、本当に！」

「そんなはずはねえがな」と若衆は小首を傾げたが、思い出したように盤台をゴシゴシ。

十分ばかりもゴシゴシやっただと思うと、またもや、「三公」

「三公三公って一々呼ばなくても、三公はここにいるよ」

「お上さんのところへ、この節郵便が来やしねえか？」

「郵便はしよつちゆう来るよ」

「なあに、しよつちゆう来るのでなしに、お上さんが親方へ見せずに独りで読むのが？」

「どうだか、俺おいちはそんなことは気をつけてねえから……や！ お上さん」

「え?!」と若衆も驚いて振り返ると、お上さんのお光はいつの間にか帰うしろつて背後うしろに立っている。

「精が出るね」

「へへ、ちつともお帰んなすつたのを知らねえで……外はお寒うがしよう？」

「何なにだね！ この暖あつたかいのに」と蝙蝠傘こうもりがさを畳たたむ。

「え、そりやお天気ですからね」と為なさんこのところ少すこてれの気味。

お光は店あがを揚あつて、脱りようぐいだ両刃りようぐりの駒下駄こまげたと傘かさとを、次の茶の間を通り抜けた縁側すみの下の駄箱しまへ蔵しまうと、着ちていた秩父銘撰ちちぶめいせんの半纏はんてんを袖そで畳たたみにして、今一間茶の間と並んだ座敷たんすの筆筒たんすの上へ置いて、同じ秩父銘撰ちちぶめいせんの着物の半襟はんえりのかかったのに、引ひツかけに結むすんだ黒縹くろひら子の帯おびの弛ゆるみ心地こころなのを、両手りょうてでキユウと緊しめ直ただしながら二階にかいへ上あつて行く。その階子段はしごたんの足音あしなのやんだ時、若衆わかしゅの為なさんはベロリと舌しほを吐はいた。

「三公、手前てまへお上さんの帰かえつたのを知しつて、黙もくつてたな？」

「偽いつせだよ！ 俺わしはこつちを向むかいて話わしたもんだから、あの時まで知らなかつたんだよ」

「俺の喋つてたことを聞いたかしら？」

「聞いたかも知れんよ」

「ちよ！ どうなるものか」と言いさまザブリと盤台へ水を打つ注けて、「こう三公、掃除が済んだら手前もここへ来や。早く片づけて、明るいうちに湯へ行くべえ」

後は浪花節を呷る声と、束藁のゴシゴシ水のザブザブ。

二階には腎臓病の主が寝ているのである。窓の高い天井の低い割には、かなり明るい六畳の間で、申しわけのような床の間もあつて、申しわけのような掛け物もかかつて、お詠えの蠟石の玉がメリンスの蓐に飾られてある。更紗の掻巻を撥ねて、毛布をかけた敷布団の上に胡座を掻いたのは主の新造で、年は三十前後、キリリとした目鼻立ちの、どこかイナセには出来ていても、真青な色をして、少し腫みのある顔を悲しそうに蹙めながら、そつと腰の周囲をさすつているところは男前も何もない、血気盛りであるだけかえつてみじめが深い。

差し向つて坐つたお光は、「私の留守に、どこか変りはなかつたかね？」

「別にどこも……相変らずズキズキ疼くだけよ」

「どうかその、疼くだけでも早く医者の方で直らないものかねえ！ あまり痛むなら、菟蓐でも茹でて上げようか？」

「なに、懐炉を当ててるから……今日はそれに、一度も通じがねえから、さつき下剤を飲んで見たがまだ利かねえ、そのせいか胸がムカムカしてな」

「いけないね、じゃもう一度下剤をかけて見たらどうだね！」

「いや、もう少し待つて見て、いよいよ利きが見えなかつたら灌腸しよう」と下腹をさすりながら、「どうだったたい、お仙ちゃんの話は？」

「まあ九分までは出来たようなものさ、何しろ阿母さんが大弾みでね」

「お母の大弾みはそのはずだが、当人のお仙ちゃんはどうかんだい？」

「どうと言って、別にこうと決った考えがあるでもないから、つまり阿母さん次第さ。もつともあの娘の始めの口振りじゃ、何でも勤人のところへ行きたい様子で、どうも船乗りではと、進まないらしいようだったがね、私がだんだん詳しい話をして、並みの船乗りではない、これこれこういうことをする人だと割って聞かしたものだから、しまいにはいろいろ自分の方から問いを出して考えていたつけ。あの通り纏致はいいし、それに読み書きが好きで、しょっちゅう新聞や小説本ばかり覗いてるような風だから、幾らか気位が高くなってるんでしよう」

「だってお前、気位が高いから船乗りが厭だてえのは間違ってる。そりや三文渡しの船頭も船乗りなりや川蒸気たの石炭焚きも船乗りだが、そのかわりまた汽船の船長だつて軍艦の士官だつ

てやつぱり船乗りじゃねえか。金さんの話で見りやなかなか大したものだ、いわば世界中の海を跨またにかけて男らしい為事しごとで、端月給を取って上役にピヨコピヨコ頭を下げてるような勤人よるか、どのくらい亭主に持つて肩身が広いか知れやしねえ」

「本当にね、私もそう思うのさ。第一気楽じゃないか、亭主は一年の半分上から留守で、高々三月か四月しか陸おかにいないんだから、後は寝て暮らそうとどうしようと気儘きままなもので……それに、貰もらう方かたでなるべく年寄りのある方がいいという注文なんだから、こんないい口がほかにあるものかね。お仙ちゃんが片づけば、どうしたってあの阿母あはさんは引き取るか貢ぐかしなけりやならないのだが、まあ大抵の男は、そんな厄介やっかい付きは厭いやがるからね」

「そうさ、俺にしても恐れられあ。だが、金さんの身になりや年寄りでも附けとかなきや心配だらうよ、何しろ自分は始終留守で、若い女房を独り置いとくのだから……なあお光、お前にしたって何だろ、亭主は年中家にいず、それで月々仕送りは来て、毎日遊んで食って寝るのが為事わざとしたら、ちよいとこう、浮氣の一つも稼いで見る気にならねえものでもなからう」と腰をさすりさすり病人厭言いやごとを言う。

お光は済すまましたもので、「そうね、自分が増えて見ないことにや何とも分りませぬね」

と、言っているところへ、階子段はしごだんの下から小僧の声で、「お上さん、お上さん」

「あいよ。何だね、騒々しい！」

「お上さん！」

「あいよつたら！」

小僧はついにその返事が聞えなかったと見えて、けたたましく階子段を駆け上って来て、上り口からさらに、

「お上さん！」

「何だよ！ さつきから返事をしてるじゃないか」

「そうですか」と小僧は目をパチクリさせて、そのまま下りて行こうとする。

「あれ、なぜ黙って行くのさ。呼んだのは何の用だい？」

「へい、お客様で……こないだ馬の骨を持って来たあの人が……」

「何、馬の骨だつて？」と新造。

「いいえ、きつとあの金さんのことなんですよ」

「ええ、その金さんのことなんで」

「金さんだなんて、お前などがそんな生意気な口を利くものじゃない！」

「へい」

お光は新造に向つて、「どうしましょう、ここへ通しましょうか？」

「ここじゃあんまり取り散らかしてあるから、下の座敷がいいじゃねえか」

「じゃ、とにかく座敷へ通しましょう」とお光が立ちかかると、小僧は身を返してバタバタと先へ下りて行く。

店先へ立ち迎えて見ると、客は察しに違たがわぬ金之助で、今日は紺しの縞ま羅ら紗しゃの背むしろ広おに筵お織おりのズボン、烏打帽子を片手に、お光の請こずるまま座敷へ通つたが、後見送つた若衆の為ためさんは、忌いまいま々ましそうに舌打ち一つ、手拭てぬぐい肩かたにプイと銭湯へ出て行くのであつた。

金之助は座に着くとまず訊ねた、「どうだね、新さんの病氣は？」

「どうも相変らずだね」

「やっぱり方々が疼いたくんだね？」

「はあ。どうかその疼いたくだけでも留とどつたらとそう思うんだけどね……自分も苦しいだろうが、どうも見ていて傍たはがたまらないのさ」とお光は美しい眉根まゆねを寄せてしみじみ言つたが、「もつともね、あの病氣は命にどうこうという心配がないそうだから、遅かれ早かれ、いずれ直るには違ちがひないから氣丈夫じゃあるけど、何しろ今日の苦しみが激しいからね、あれじゃそりや体も瘦やせるわ」

「まあしかし、直るといふ当てがあるからいいやな。あまり心配して、お光さんまで体を悪くするようなことがあっちゃ大変だ」

「ありがたい、私やなに、これで存外体は丈夫なんだからね」とまずニツコリしながら、「金さん、今日はお前さんいいところおいでだったよ。実はね、明日あたりお前さんの方へ出向こうかと思つてたのだが……それはそれは申し分のない、金さんのお上さんに誂え向きといういい娘が見つかつただよ」

「そいつはありがたいね、ははは、金さんに誂え向きの娘なら、飴あめの中のお多さんじゃねえか」
「あれ、笑談じょうだんじゃないんだよ。まあ写真を見せるから……」と立ちかける。

「いや、お光さん、写真も写真だが、今日は実は病氣見舞いに来たんだから、まずちよいと新さんに会いてえものだが……」と何やら風呂敷包みを出して、「こりやうまくはなさそうだけれど、消化こなれがいてえから、病人に上げて見てくんな」

「まあ、何だか知らないが、来るたび頂戴して済まないねえ。じゃ、取り散らかしてあるが二階へ通つておくれか」

「そうしよう」

そこで、お光は風呂敷包みをもって先に立つと、金之助もそれについて二階へ上る。

新造と金之助と一通り挨拶あいさつの終るのを待って、お光は例の風呂敷を解いて夫に見せた。桐きりの張附けの立派な箱に紅白の水引をかけて、表に「越こしの雲みぞれ」としてある。

「お前さん、こんな物を頂戴しましたよ」

「そうか。いや金さん、こんなことをしておくんなすっちゃ困るね。この前はこの前であんな金目の物を貰うしまたどうもこんな結構なものを……」

「なに、そんなに言いなざるほどの物じゃねえんで……ほんのお見舞いの印でさ」

「まあせつかくだから、これはありがたく頂戴しておくが、これからはね、どうか一切こういうことはやめにして……それでない、と、親類付合いに願うはずのがかえって他人行儀になるから……そう、親類付合いと一言や」とお光を顧みて、「お前、お仙ちゃんの話をしたかい？」

「いえ、まだ詳しいことは……」

「じゃ、詳しく話したらどうだい？」

「はあ、じゃとにかくあの写真を……」とお光は下へ取りに行く。

後に新造は、「お光がね、金さんにぜひどうかいいのがお世話したいと言って、こないだからもう夢中になって捜してるのさ」

「どうかそんなようで……恐れ入りますね」

「今日ちようど一人あつたんだが……これは少し私の続き合いにもなってるから、私が賞めるのも変なものだけれど、全くのところ、氣立てと言ひ纏致と言ひよっぽどよく出来てるので……今写真をお目にかけるが……」と言つてるところへ、お光は写真を持つて上つて来た。

「さあ、金さん」と差し出されたのを、金之助は手に取つて見ると、それは手札形の半身で、何さま十人並み勝れた愛くるしい娘姿。年は十九か、二十にはまだなるまいと思われるが、それにしても思いきつてはでな下町作りで、頭は結綿にモール細工の前挿し、羽織はなしで友禪の腹合せ、着物は滝縞の糸織らしい。

「ねえ金さん、それならお氣に入るでしょう？」とお光は笑いながら言つたが、亭主の前であるからか辞使いが妙に改まつている。

「そうですね、私にや少し過ぎてるかも知れねえて」

「そんなことはないけど、写真で見るよりかもう少し品があつて、口数の少ないオットリした、それはいい娘ですよ」

「そんないい娘が、私のような乱暴者を亭主に持つて、辛抱が出来るかしら」

「それは私が引き受ける」と新造が横から引き取つて、「一体その娘の死んだ親父というのが恐ろしい道楽者で自分一代にかなりの身上を奇麗に飲み潰してしまつて、後には借金こそなかつ

だが、随分みじめな中をお母と二人きりで、少さい時からなかなか苦勞をし尽して来たんだからね。並みの懐子とは違って、少しの苦しみや愁いくらいは驚きやしないから」

「それもそうだし、第一金さんのとこへ片づいて、辛抱の出来ないようなそんな苦しいことや、愁いことがあるうわけがなさそうに思われるがね。それとも金さん、何かお上さんが辛抱の出来ないようなことを、これからし出来そうってつもりでもあるのかね？」

お光の辭をどう取ったのか、金之助は心持ち顔を赤めて、「馬鹿な！ そんな何が、ある理屈はねえけれど……どうもこう、見たところこんなおとなし作りの娘を、船乗りの暴れ者の女房にや可哀そうのようですね」

「だって、先方が承知でぜひ行きたいと言うんだもの」

「ははは、あんまりそうでもあるめて、ねえ新さん」

「ところが、先方のお母なぞと来たたら、大乗り気だそうだから、どうだね金さん、一つ真面目に考えて見なすつたら？」と新造は大真面目なので。

「ええ、そうですね」と金之助も始めて真剣らしく、「じゃ、私もよく一つ考えて見ましようよ」

「だが金さん、その写真は氣に入ったか入らないか……まあさ、それだけお聞かせなね」

「どうもこう詰開きにされちゃ驚くね。そりゃ縹致はこれなら申し分はねえが……」

「縹致は申し分ないが、ほかに何か申し分が……」

「まあま、お光さん、とにかく一つ考えさせてもらわなけりゃ……何しろまだ家もねえような始末だから、女房を貰うにしても、さしあたり寝さすところから拵こしらえてかからねえじゃならねえんだからね」

「実は、この間うちからどうもそんなような徴候が見えたから、あらかじめ御注意はしておいたのだが、今日のようにじゃもう疑いなく尿毒性で……どうも尿毒性となると、普通の腎臓病と違ってきわめて危険な重症だから……どうです、お上さんかみ、もう一人誰かほかの医者にお見せなすつたら。もしそれで、私の見立てが違っていたらこれに越したことはない」

二三日来急に容体の変つて来た新造の病気を診察した後で、医者は二階から下りてこうお光に言ったのである。なるほど素人目しろうとめにも、この二三日の容体はさすがに氣遣きづかわれたのであるが、日ごろ腎臓病なるものは必ず全治するものと妄信していたお光の、このゆゆしげな医者 of 言いに、思わず色を変えて太胸とむねを突いた。

「まあ！ じゃその尿毒性とやらになりますと、もうむずかしいんでございますか？」

「だが、私わしの見立て違いかも知れんから、も一人誰かにお見せなさい」

「はい、それは見せますにしましても、先生のお見立てではもう……」

「そうです。もう疑いなく尿毒性と診断したんです！ かしほかの医者は、どうまた違った

意見があるかも知りません」

「それで何でございましたか、先生のお見立て通りでございましたら……あの、尿毒性とやら申すのでございましたら……」とお光はもうオロオロしている。

「尿毒性であると、よほどこれは危険で……お上さん、私は気安めを言うのはかえって不深切と思うから、本当のことを言つて上げるが、もし尿毒性に違いないとすると、まずむずかしいものと思わねばなりませんぞ！」

「……………」

「とにかく、ほかの医者にも見ておもらいなさい、私ももう二三日経過を見て見るから」

「はい」

「今日から薬が少し変わるから、そのつもりで」

「はい」

医者は帰った。お光は送り出しておいて、茶の間に帰るとそのままバツタリ長火鉢の前にくずおれたが、目は一杯に涙を湛えた。頬に流れ落ちる滴を拭いてもやらずに、頤を襟に埋めたまま、いつまでもいつまでもジツと考え込んでいたが、ふと二階の呻り声に気がついて、ようやく力ない体を起したのであった。が、階子段の下まで行くと、胸は迫って、涙はハラハラと

めどなく堰き上ぐるので、顔を抑えて火鉢の前へ引り返したのである。

で、小僧を呼んで、「店は私が見てるからね、お前少し二階へ行つて、親方の傍についておいでな」

「へい、ただついてりやいいんですか？」

「そんなこと聞かなくて……親方がさすつてくれと言つたらさすつて上げるんじゃないか」「へい。ですが、こないだ腫んでた皮を赤剥けにして、親方に譴られましたもの……」と渋くつたが、見ると、お上さんは目を真赤に泣き腫らしているので、小僧は何と思つたか、ひどく濟まないような顔をしてコソコソと二階へ上つて行く。

「医者あの口振りじゃ、九分九厘むつかしそうなんだが……全くそんなだろうか」と情なさそうに独言ちて、お光は目を拭つた。

ところへ、「郵便！」と言う声が店に聞えて立つたが、自分の泣き顔に気がついて出るのはためらつた。

「吉田さん、郵便！」

「はこ」

「ここへ置きますよ」

配達夫の立ち去った後で、お光はようやく店に出て、かまうちぎわ 框際の端書を拾って茶の間へ帰ったが、見ると自分の名宛で、差出人はかのお仙ちゃんなるその娘の母親。文言は例のお話の縁談について、明日ちよっとお伺いしたいが、お差支えはないかとの問合せて、配達が遅れたものと見え、日附は昨日の出である。

端書を膝の上に置いて、お光はまたそれにいつまでも見入った。

「全くもうむずかしいんだとしたら……」としばらくしてから口に出して言ったが、妙に目を光らせてあたりを見廻し、膝の上の端書を手早く四つに折って帯の間へ蔵うと、火鉢に凭れて火をせせり出す。

長火鉢の猫板に片脇突いて、美しい額際を抑えながら、片手の火箸で炭を突ッ衝いたり、灰を平したりしていたが、やがてその手も動かさずなる。目は瞬きもやんだように、ひたと両の瞳を据えたまま、炭火のだんだん灰になるのを見つめているうちに、顔は火鉢の活気に熱つてか、ポツと赤味を潮して涙も乾く。

「いよいよむずかしいんだとしたら、私……」とまた同じ言を呟いた。帯の間から前の端書を取り出して、もう一度読んで見たが、今度は二つに引き裂いて捨てたのである。

「お上さん、三公はどっかへ出ましたか？」と店から声をかけられて、お光は始めて気がつく

と、若衆の為さんが用足しから帰ったので、中仕切の千本格子の間からこちらを覗いている。

「三吉は今二階だが、何か用かね？」

「なに、そんならいいんですが、またどっかへ遊びにでも出たかと思ひまして」と中仕切をあけて、

「火種を一つ貰えませんか？」

「火鉢をお貸し」

為さんは店の真鍮火鉢を押し出して、火種を貰うと、手元へ引きつけてまず一服。中仕切の格子戸はあけたまま、さらにお光に談しかけるのであった。

「お上さん、親方はどんなあんばいですね？」

「どうもね、快くないんで困ってしまうわ」

「ああどうも長引いちや、お上さんもお寂しいでしょう？」

「寂しいって？」お光は合点の行かぬ顔をして、「なぜね？」

「へへへ、でもお寂しそうに見えますもの……」と胡散くさい目をしながら、「何は、金之助さんは四五日見えませんか？」

お光は黙って顔を眺めた。

「あの人は何でしょう、前から何も親方と知合いというわけじゃないんでしょう？」

「深い知合いというでもないが、小児の時学校が一緒とかで、顔は前から知ってるんだって」

「そうですか。私わしやまたお上さんがお近しいから、そんな縁引きで今度親方のとこへも来なすつたんだと思ひまして……いえね、金さんの方じゃ知んなさねえようだが、私や以前あの人の家のじき近所に小僧をしていて、あの人のことはよく知ってますのさ」

「そう、いつごろのこと？」

「そうですね、もう四五年前のことでしょう、お上さんがまだ島田なんぞ結むすつてなすつたところで」

「へえい、じゃ私のこともそのころ知ってて？」

「ええ、お上さんのことはそんなによく知りませんが、でも寄席よせへなぞ金さんと一緒に来てなすつて、あれがお光さんという清元の上手な娘むすめだつて、友達から聞いたことはありますんで……金さんも何でしょう、昔馴染むかしなじみてえので、今でもお上さんが他人のように思えねえんでしよう」とニヤリ歯を見せて笑う。

お光はサツと顔を赤くしたが、「つまらないことをお言いでないよ！ 昔馴染みだとか、他人のように思えないだとか、何か私と厭いやらしいことでもあつたようで、人聞きが悪いじゃないか」

「へへ、誰も人は聞いてやしませんから大丈夫でさ」

「あれ、まだこの人はあんなことを言つて！ 金さんと私とは、娘の時から知合いというだけ——それは親同士が近しく暮らしたのだから、お互いに行ったり来たり、随分一緒にもなつて同胞きょうだいのようにしてたけど……してたというだけで、ただそれだけのものじゃないか、お前さんもよっぽど廻り気の人だね」

「へへ、そうですね」と為さんは例のニヤリとして、「私もどうか金さんのような同胞に、一度でいいから扱われて見てえもんですね」

「じゃ、金さんの弟分にでもなるさ」と言い捨てて、お光はつと火鉢を離れて二階へ行こうとすると、この時ちようと店先へガラガラと俵くろまが留つた。

俵を下りたのは六十近くの品のいい媪ばあさんで、車夫に銭を払つて店へ入ると、為さんに、「あの、私はお仙のお母おつかでございますが、こちらのお上さんに少しお目にかかりたくてまいりましたので……」

「まあ阿母おつかさん、よくまあ！」とお光は急いで店先へ出迎える。

媪さんはニコニコしながら、「とうとうお邪魔に出ましたよ。不ご断は御無沙汰ごぶさたばかりしているくせに、自分の用があると早速こうしてねえ、本当に何という身勝手でしょう」

「まあこちらへお上んなさいよ、そこじゃ御挨拶も出来ませんから」

「ええ、それじゃ御免なさいましよ、御遠慮なしに」とお光の後について座敷へ通りながら、

「昨日あの、ちよいと端書を上げておきましたか……」

「あれがね、阿母さん、遅れてつい今し方着いたんですよ」

「まあ、そうですね。やっぱり字の書きようが拙いので、読めにくくってそれで遅れたんでございましょうね。それじゃお光さんにも読みづらかったですよ、昔者の私書いたのですからねえ」

「いいえ、そんなことはありませんよ。私にはよく分りましたけど、全くそういうわけで御返事を上げなかつたんですから……さあどうぞお敷き下さい」

お光は蓐火鉢しよねと氣を利かして、茶に菓子に愛相よくもてなしながら、こないだ上つた時にはいろいろ御馳走になつたお札や、その後一度伺おう伺おうと思ひながら、手前にかまけてつい御無沙汰ごむさたしているお詫わびなど述べ終るのを待つて、媼おきなさんは洋銀の細口の煙管きせるをポンと払はたき、煙をフツと通して、氣忙しそうに膝を進める。

「実はね、お光さん、今日わざわざお邪魔に上りましたのもね、やっぱりその、こないだおいで下さいましたあの話でございませうがね。どうでしょう、私はもとよりのこと、お仙もぜひお

世話が願いたいとそう申しているのですが……向う様のお口振りはどんなでしょう？」

「向うですか……」と言って、お光は黙って考えている。

媼さんは心もとなげに眺めていたが、一段声を低めて、「これはね、ここだけの話ですが——もつとも、お光さんは何もかも知っておいでなさることだから、お談しせずともだけれど、あれも来年はもう二十はたちでございませうからね。それに御存じの通りていつらくの為体で、一向支度したくらしい支度もありませんし、おまけに私という厄介者やっかいものまで附いているような始末で、正直なところ、今度のような話を取り逃した日には、滅多めったにもうそういう口はございませうからね……これはお光さんだけへの話ですけど、私はどうか今度の話が纏まとまるように、一生懸命お不動様へ願がけしているくらいなんですよ」

「ほほほ、阿母さんもあまりそれは、安く自分で落し過ぎますよ。可哀そうにお仙ちゃんは、縹致きりようだつて氣立てだつてあの通り申し分ないんですもの、そりゃ行こうとなさりやどんなところへでも……」

「いいえ、そんなことを思っていると大間違いです。こないだもね、お光さんがおいで下すつた時に、何だかあれが煮えきらない様子でしたから、後で私がそう言つて聞かしたことですよ。お前なんぞ年が若いから、もしね、人並みの顔や姿でとんだ自惚うぬぼれでも持つて、あの、口なく

して玉の輿こしなんて草双紙にでもあるようなことを考えてるなら、それこそ大間違い！ 妾手掛めかけてかけなら知らないこと、この世知辛い世に顔や纏致で女房を貰う者は、唐天竺からてんじくにだってありはしない。纏致よりは支度、支度よりは持参、嫁の年よりはまず親の身代を聞こうという代世界よせかいだもの、そんな自惚れなんぞ決してお持ちでないって、ねえ、そう言ったことですよ」

「だって、何ほ今の代世界だって、阿母さんのようにそう一概に言ったものでもありませんよ。随分また纏致や氣立てに惚れた縁組も、世間には限りませんもの。阿母さんのように言ってしまった日には、まるで男女おとこおんなの情間じょうあいなんてものはなさそうですけど、今だって何じゃありませんか、惚れたのはれたのと、欲も得も忘れて一生懸命になる人もあるし、よくそんな話が新聞なぞにも出ているじゃありませんか」とお光は真剣になつて弁駁べんぱくする。

「ええ、それはそうですね。私なぞも新聞を見るたび、どうしてこんなことがと不思議に思うようなことがよくありますからね。それは広い世間ですから、いろいろなこともございますよね」と媪おばあさんはいい加減にあしらつて、例の洋銀の煙管きせるで一服吸つてから、「それで、何でしょうか、写真は向う様へお見せ下さいましたでしょうか？」

「ええ、それは見せました、こないだ私がお宅から帰ると、都合よくちようど先の人が来合あわせたものですから」

「それで、御覧なさいましてどんなお口振りでした？」

「別はその時は……何しろ急いでいたものですからね、とにかく借してくれてそのまま持つて行きましたが……それは、お仙ちゃんのあの纏致ですから、あれを見て気に入らないってことはありますまいよ」とお光は気の乗らぬ笑顔をする。

「ですがね、あの写真は変に目が怖く写っていますから……」

「そんなことはありやしませんよ。けれど、ただね、ちとどうも若過ぎやしないかって……」

「ええ、私もそれを言わないことじゃなかったのですよ、あまりあれじゃはで作りで、どう見ても七か八に見えますもの。正真なところ、二月生まれの十九ですから……お光さんからもそうちよつと断っておもらい申すでしたにねえ」

「そりや言いましたとも。お世話をしようてのに、年を言わないってことがあるものですか、ほほほほ、何ですよ！ 阿母さん」

「大きにね、御免なさいよ。そこらに如才のあるようなお光さんでもないのに、私もどうかしていますね、ほほほほ」と媼さんも笑って、「では、写真を持っておいでなさいましてから、その後まだ何とも？」

「はあ、いろいろ何だか用の多い人ですから……」

「いえね、それならば何ですけど、実はね、こないだお光さんのお話の様子では大分お急ぎのようでしたから、それが今日までお沙汰のないところを見ると、てっきりこれはいけないのだらうとそう思いましてね。じゃ、まだそう気を落したものでないのをごさいますね」と言つて、媼おらわらさんは空笑そらわらいをする。

お光も苦笑いをして、「でも、全くあの時は先方さきの口振りがいかにも急ぎのようでしたものですから……いえ、どっちにしてもほかのこととは違いますし、阿母さんの方だつて心待ちにしておいでのこととは分つてますから、先方さきが何とも言つて来ないからつて、それで打遣うちぢやつておいちや済みませんわね。私もね、実はもうこないだから、一度向うへ出向でしやうこう出向でしやうこうとそう思つちやいるんですけど、ついでどうも……何分病人を抱かかえてちつとも体が外はずせないものですからね」

言われて媼さんは始めて気がついたらしく、「まあ、私としたことが、自分の勝手なことばかり喋しゃべつていて……ほんにまあ、御病人はどんなでおいでなさいますね、まだおよろしくごさいますせんかよ」

「え、よろしいどころなものですか、今日もお医者から……」と言い半はんして、お光は何と思つたか急に辞ことばを変かえて、「何なにしろ質たちのよくない病氣びやうきなんですもの」

「質がね？ それじゃ御病人も何でしょうが、お光さんが大抵じゃございませぬね。そんな中へどうも、こんな御面倒な話を持ち込みましたや……」と媪さんは何か思案に晦れる。荻を填めては吸い填めては吸い、しまいにゴホゴホ咽せ返って苦しんだが、やツと落ち着いたところで、「お光さん、一体今度のお話の……金之助さんとかいうのでしたね？ その方はどこに今おいででございますね？」

「え、それは靈岸島の宿屋ですが……こうと、明日は午前何だから……阿母さん、明日夕方か、それとも明後日のお午過ぎには私が向うへ行きますからね、何とか返事を聞いて、帰りにお宅へ廻りましょう」

四

金之助の泊っているのは靈岸島の下田屋という船宿で。しかしこの船宿は、かの待合同様な遊船宿のそれではない、清国の津々浦々から上つて来る和船帆前船の品川前から大川口へ碇泊して船頭船子をお客にしている船乗りの旅宿で、座敷の真中に赤毛布を敷いて、櫂の岩置な角火鉢を間に、金之助と相向つて坐っているのはお光である。今日は洗髪髪の櫛巻で、節米の鼠縞の着物に、唐襦子と更紗縮緬の昼夜帯、羽織が藍納戸の薩摩筋のお召という飾し込みで、宿の女中が崑蕩島あたりと見たのも無理ではない。

「馬鹿に今日は美しいんだね」と金之助はジロジロ女の身装を見やりながら、「それに、俵なぞ待たしといて、どこぞへこれから廻ろうてえのかね？」

「はあ、少しほかへも……」と言って、お光は何か心とがめらるるように顔を赤める。

「じゃ、ちつとは新さんも快い方だと見えるね？　そうやってお前が歩くとこを見ると」

「いえね、あの病気は始終そう付き限りでないやならないというのでもないから……それに、今日佃の方から雇い婆さんを一人よこしてもらつて、その婆さんの方が、私よりよっぽど

病人の世話にも慣れてるんだから」

「それじゃ、病人の方は格別快いてえわけでもねえんだね？」

「ええ、どうもね」

「その代り、大して悪くもならねえんだろう」

「ええ」と頷く。

「そういうのはどうしても直りが遅いわけさね。新さんもじれったかろうが、お光さんも大抵じゃあるめえ」

「そりゃ随分ね何も病人の言うことを一々気にかけるじゃないけど、こつちがそれだけにしてもやっぱり不足たらだらで、私もつくづく厭になっちまうことがありますよ。誰でも言うことだけど、人間はもう体の健まなのが何よりね」

「だが、俺のように体ばかり健で、ほかに取得のねえのも困ったものさ。俺はちつとは病わづらつてもいいから、新さんの果報の半分でもあやかりてえもんだ」

「まあ、とんだ物好きね。内のがどう果報なんだろう？」

「果報じゃねえか、第一金はあるしよ……」

「御笑談もんですよ！ 金なんか一文もあるものかね。資本もとだつて何だつて、皆佃の方から廻

してもらってやってるんだもの、私たちはいわば佃の出店を預ってるようなものさ」

「そりゃどうだか知らねえが、何しろ新さんはお光さんてえいいお上さんを持って……ねえ、こいつは金で買われねえ果報ださ」

「おや、どうもありがとう。だが、もうそんなことを言ってもらって嬉しがるような年でもないから大丈夫自惚れやしないからたんとお言い」とお光はちつとも動ぜず、洗い髪のハラハラ零れるのを掻き揚げながら、「お上さんと言や、金さん、今日私の来たのはね」

「来たのは？」

「ほかでもないが、こないだの、そら、写真のはどうなの？」と鋭い目をしてじつと男の顔を見つめる。

「うむ、あれか、可愛らしいね」

「可愛らしいからどうなの？」

「どうてえこともねえさ」

「何だね！ この人は。お前さん考えとくと言って持って帰ったんじゃないかね？」

「そうさ」

「じゃ、考えたの？」

「別に考えて見もしねえが、くれるなら貰^{もら}つてもいい」

「貰^{もら}つてもいいんだなんて、何だか一向弾^{はず}まない返事だね」

「なに、弾まねえてえわけでもねえんだが……何しろこうして宿屋の二階に燻^{くすぶ}つてるような始末で、まるで旅へでも来た心持なんだからね。まあ家でも持つて、ちゃんと一所帯構えねえこととにや女房の話も真剣事になれねえじゃねえか」

「そりゃ、まあね」とお光は意を得たもののように頷いて見せる。

「だが、向うは返事を急いでもいるのかい？」

「向うはなに、別に急いでもいやしないけどね」

「急がなくなつて、何もこれ、早くくれてしまわなきゃ腐^くるてえものでもねえんだからな」

「当り前さ、夏のお萩餅^{はぎもち}か何ぞじゃあるまいし……ありようを言うとな、娘もまだ年^{とし}は行つても全小姐^{からねんね}なんだから、親ももう少し先へなつてからの方が望^{のぞ}みなんかも知れないのさ」

「じゃ、とにかくもう少し待つてもらおうじゃねえか。第一お前、肝心の仲人があの通りの始末なんだもの」

「仲人があの通りつてどう？」

「新さんの今のとこさ」

「ああ、だけど、それを言っちゃいつのことだか分らないかも知れないよ」と伏目になって言った。

金之助は深くも気に留めぬ様子で、「こつちだっていつのことだかまだ分らねえんだから……だが、わけのねえことだから、見合だけちよつとやらかして見ようか？」

「え、見合いを!!」お光はぎよつとしたように面を振り挙げたが、「さあ……ね、だけど、見合いをすりゃ、すぐ何とか後の話をしなけりゃならないからね。見合いをしつ放しにして、いつでもまた引つ張つとくというわけにも行かないから……まあ何てことなしに延ばしといたらいいじゃないかね」

「そうかい、それじゃまあ、どうなりとお光さんの考え通りに任せるから、よろしく頼むよ」金之助は急須に湯を注さしたが、茶はもう出流れているので、手を叩いて女中を呼ぶ。

間もなく、「何か御用ですか?」と不作法に縁側の外から用を聞いて、女中はジロジロお光の姿を見るのであった。

「御用だから呼んだのよ。この急須を空けちちまつての、新しく茶を入れて来な」

「はい」と女中はようよう膝を折って、遠くから片手を伸ばして茶盆ちやわんぐるみ引き寄せながら、

「ついでにお茶ちやわんも洗って来ましょうね」

「姐さん、あの、便所はどちらですの?」

「便所ですか? 御案内しましょう」

「はばかりさま」

女中は茶盆を持ってお光を案内する。

しばらくすると、奇麗に茶道具を洗い揚げて持つて来たが、ニヤニヤと変に笑いながら、「ちよいと、あなたのレコなの?」と女中は小指を出して見せる。

「何が? 馬鹿言え」

「隠したって駄目よ。どこの芸者?」

「芸者だ? 馬鹿言え! よその立派な上さんだ」

「とか何とかおっしゃいますね。白粉つけなしの、わざと櫛巻か何かで堅気らしく見せたって、商売人はどこかこう意気だからたまらないわね。どこの芸者? 隠さずに言っておしまいなさいよ」

「ちよ! 芸者じゃねえってのに、しつこい奴だな」

「まだ隠してるよ! あなたが言わなきや俵屋に聞いてやる」

「俵屋が何とか言ってますか?」と背後からお光が入って来た。

「あら！」と女中は真赤になつて、「まあ、御免なさいまし。いえね、お尻しんどを振らずに俵屋は走れないものか、それを聞いて見ようとそう申して……ほほほほ。あなた布団をお敷き遊ばせ」と格がらにもない遊ばせ辞ことばをてれ隠しに、そのままバタバタと馳はせ去つたのである。

「何のことなの？ 女中の言つたのは」

「なあに、馬鹿馬鹿しいのさ。お光さんのことをどこの芸者だつて……」

「まあ、厭いやよ……」

「芸者なものか、よその歴れっきとしたお上さんだと言つても、どうしても承知しやがらねえで、俺が隠してるから俵屋に聞いて見るつて、そう言つてるところへヒョッコリお光さんが帰つて来たのさ。お多福め、苦しがりやがつて俵屋の尻が何だとか……はははは、腹の皮を綱よらしやがつた。だが、そう見られるほど意氣に出来てりやしうがねえ」

「およしよ！ 聞きたくもない」とお光は氣障きざがつて、「だけど、芸者が何で金さんのところへ来たと思つたんだろう！」

「それがまたおかしいのさ。馬鹿は馬鹿だけの手前勘で、お光さんのことを俺のレコだろうつて、そう吐ぬかしやがるのさ、馬鹿馬鹿しくつて腹も立てられねえ」

お光はただ笑つて聞いたが、「そうそう、私やその話で思い出したが、今家にいる若い者ね」

「むむ、あの店にいる三十近くの?」

「あれさ、為ためといつて佃かっぎの方の店で担人かっぎをしていた者でね、内のが病氣中、代りに得意廻りをさすのによこしてもらつたんだが、あれがまた、金さんと私の間なかを變に疑つておかしいのさ。

私が吉新へ片づかない前に、何でも金さんとわけがあつたに違いないんだつて」

「へええ、どうしてお光さんの片づかねえ前のことなんか——お互いに何も後暗いことはねえから、何と言おうがかまわねえけれど、どうしてまたそんなころのことを知ってるんだらう?」

「それがさ、お前さんをその時分よく知つて、それから私のことも知ってるんだつて」

「はてね、俺が佃かっぎにいる時分、為ためつてえそんな奴があつたかしら」

「それは金さんの方じゃ知らないだらうつて、自分でも言つてるんだが、何でもね、あの近辺で小僧か何かして、それでお前さんを知ってるんだそうだが、寄席よせなどでよく私と二人のところを見かけたつて……変な奴がまた、家へ来たものさねえ」

「そりゃしかし、お光さんも迷惑だらうな。くだらねえこと言やがつて、もしか新さんの耳にでも入つたら痛くねえ腹も探られなきやならねえ」

「なにもね内の耳へ入れるようなことはさせないから、そりゃ大丈夫だけど……金さん、もう何時いつだらう?」と思ひ出したように聞く。

金之助は床の間に置いてあつた銀側時計を取つて見て、「三時半少し過ぎだ。まあいいじゃねえか」

「いえ、そうしちゃいられないの、まだほかへ廻らなきゃならないから……」とお光は身支度しかけたが、「あの、こないだの写真は空あいてて？」

「持つてくかい？」

「え、あれはほかでちよいと借りたんだから」

五

お光の俵は靈岸島からさらに中洲へ廻なかつつて、中洲は例のお仙親子の住居を訪れるので、一昨日おととい媼さんがお光を訪ねた時の話では、明日の夕方か、明後日の午後にと言ったその午後がもう四時すぎ、昨日もいたずらに待惚まちぼけ食うし、今日もどうやら当てにならないらしく思われたので。「今まで来ないところを見ると、今日も来ないだろう、どうも一昨日行つた時のお光さんの様子ようすが——そりゃ病人を抱えていちゃ、人のことなんぞ身にも人らなからうけれど——この前家へ来た時の気込みとはまるで違つてしまつて、何だか話のあんばいがよそよそしかつたもの」と娘を相手に媼さんが愚痴ぐちつてるところへ、俵の音がして、ちようどお光が来たのであつた。親子は裁縫の師匠しせうをしているので、つい先方さきかた弟子の娘たちが帰つた後の、断布片たちぎれや糸屑いとくずがまだ座敷に散らかつてゐるのを手早く片寄せて、ともかくもと蓐しとねに請まねずる。請まねぜられるままお光は座に就ついて、お互いに挨拶も済むと、娘は茶の支度にと引ひつ込む。

「一昨日はどうも……御病人のおあんなさるとこへ長々と談はなし込んでしまひまして、さぞ御迷惑ごめいわくなさいましたでしょうねえ。どうぞございますね？ 御病人は」

「どうも思わしくなくって困ります」とお光は辞寡ことばすくなに答えて、「昨日はお待ちなすつたでしょうね。出よう出ようと思つても、何分にも手が空あけられないものですから……今日やツと出抜け今向うへ廻つてすぐこちらへ参つたのですよ」

「まあねえ、お忙しいところを本当に済みませんね、御病人のお世話だけでも大抵なところへ、とんだまたお世話をかけてまして……」

「あれ、私の方から持ち込んだ話ですもの、お世話も何もありませんけど……」と口籠くちごもるところへ、娘のお仙は茶を淹いれて持つて来た。

例の写真ではとても十九とは思われぬが、本人を見れば年相応に大人びている、色は少し黒いが、ほかには点の打ちどころもない縹致で、オットリと上品な、どこまでも内端うちわにおとなしやかな娘で、新銘撰の着物にメリンス友禅の帯、羽織だけは着更きかえて絹縮まぬしむの小紋の置形、束髪に結つて、薄く目立たぬほどに白粉をしている。

「お仙ちゃん、どうぞもうかまわずにね、お客様じゃないんだから」

「え、何にかまやしないことよ」

「かまいたくも、おかまい申されないのでございますからね」と媼おきなさんは寂しげに笑う。

「でも、この間伺つた時にや大層御馳走になつてしまつて……」と今さらに娘の縹致を眺めて、

「本当に、お仙ちゃんはいっつ見ても美しいわね」

「あら、厭な姉さん！」

「だって、本当なんだから。束髪も気が変っていいのね」

「結いっけないから変よ」

媼さんが傍から、「お光さんこそいっつ見ても奇麗でおいでなさるよね。一つは身飾みだしみがいいせいでもおありでしょうが、二三年前とちっともお変りなさいませんね」

「変らないことがあるものですか、商売が商売ですし、それに手は足りないし、装なりも振りもかまっちゃいられないんですもの、爺穢じじむきくなるばかりですのさ」

「まあ、それで爺穢いのなら、お仙なぞもなるべく爺穢くさせたいものでございますね……あの、お仙やお前さっきの小袖を一走り届けておいでな、ついでに男物の方の寸法を聞いて来るように」

「は、じゃ行つて来ましょう……姉さん、ゆっくり談していらっしやいな、私じき行つて来ますから」とお仙は立って行く。

格子戸の開閉静かに娘の出で行った後で、媼さんは一膝進めて、「どうぞございましょう？」

「少しね、話が変わって来ましてね」

「え、変つて来ましたとは？」と氣遣わしそうに相手を見つめる。

「始めの話じゃ恐ろしく急ぎのようでしたけど、今日の口振りで見ると、まず家でも持つて、ちゃんと体も落ち着いてしまつて、それからのことにしたいつて……何だかどうも氣の永い話なんですよ」

「ですが、家をお持ちなさるぐらいのことに、別に手間も日間も要らないじゃございませんか」
「それがなかなかそうは行かないんですつて。何しろこれまで船に乗り通しで、陸おかで要る物と言つちや下駄一足持たないんですよう、そんなんですから、当人で見るとまた、私たちの考えるようになや行かないらしいんですね」

「ですがねえ。私なぞの考えで見ると、何も家をお持ちなさるからつて、暮つかに遣すすは煤掃きの煤取りから、正月飾る鏡餅かがみもちのお三方さんぽうまで一度に買い調えなきやならないというものじゃなし、お籠へっついを据えて、長火鉢を置いて、一軒のお住居をなさるにむつかしいことも何もないと思ひますがね」

「それに何ななんでしょう、今はまだ少し星が悪いんでしょう。そんなことも言つてましたよ」
「じゃ、話だけでも決めておいていただいたら……」

「え、それは私も言つたんですがね、向うの言うのじゃ、決めておくのはいいが、お互いにま

たどういふ思いも寄らない故障が起らないとも限らないから、まあもう少しとにかく待つてくれって、そう言うものですからね」

「お光さん」と媪さんは改まって言った、「どうかね、遠慮なしに本当のことを言っておくんなましよね。ほかのこととは違って、御縁のないものならしかたがないのでございますから、向う様がお断りなさいましたからって、私はそれをどうこう決して思やしませんから」

「あれ、阿母さん、私ほんとや本当のことを言ってるんですよ、全く向うの人はそう言ってるんですよ」

「つまりそれじゃ、体ていよくそう言ってお断りなさいましたんでしよう？」

「そんなことがあるもんですか」と言ったが、媪さんの顔を見るといかにも気の毒そうで、しばらく考えてから、「断ったのなら、写真も返しそうなものですけど、あれはもう少し借りときたいと言ってるんですから」

「もう少し借りときたいって？」媪さんも幾らか思い返したようで、「そうすると、お断りなすつたわけでもありませんかね」

「そうですと」と言つて、お光はそつと帯の上を撫なでる。

「けれど、いつまで待つてくれとおっしゃるのだから、それも分らないのでしようねえ。あれも

来年は二十でございませうからね、もう一だの二だのという声がかかった日にや、それこそ縁遠いのがなお縁遠くなりますからねえ」

「阿母さんもまあ！ 何ほ何だつて、そんなに一年も二年も待たされてたまるもんですか。ですからね、向うの話は向うの話にしておいて、ほかにまた話がありやそれも聞いて見て、ちつともいい方へ片づけてお上げなさりゃいいじゃありませんか」

「そんなにどこから話があるのですか」

「阿母さんはじきそんなことをお言いだけど、お仙ちゃんのようなあんない娘を……誰だつて欲しがるわ。私もまだほかにも心当りがあるから、その方へも談して見ましよう。今度のもそれは悪くはないけど何しろ船乗りという商売はあぶない商売ですからね、それにどこか氣風の暴ッばい者ですから、お仙ちゃんのようなおとなしい娘には、もう少しどうかいう人の方がとそうも思うんですよ」

ところへ、娘は帰つて来た。あたりはいつか薄暗くなつて、もう晩の支度にも取りかかる時刻であるから、お光はお仙の帰つたのを機しおに暇いとまを告げたのである。時分時じぶんときではあり、何もなければど、お光さんの好きな鰻うなぎでもそう言うからと、親子してしきりに留めたが、俵は待たせてあるし、家の病人も気にかかるというので、お光は強たつて辞し帰つたのであった。

中洲なかすを出た時には、外はまだ明るく、町には豆腐屋の喇叭らっぱ、油屋の声、点燈夫の姿が忙しうに見えたが、俣が永代橋を渡るころには、もう兩岸の電気燈も鮮やかに輝いて、船にもチラチラ火が見えたのである。清住町へ着いたのはちようど五時で、家の者はいずれも夕飯を済まして茶を飲んでいるところであつた。

「婆やさん、私が出てから親方はどんなだつたね？」

「別に変つた御様子も見えませんがございますよ。ウトウト睡ねむつてばかりおいでなさいましてね、時々床瘡とこずれが痛いと言つちや目をお覚さましなざるぐらいで……」

「お上さんが出なされるとね、じき佃の親方が見えましたよ」と若衆の為さんが言った。

「おや、そう。それでいつ阿父さんは帰つたね？」

「つい今し方帰つておいででした。何ですか、昨日の話の病人を佃の方へ移すことは、まあ少し見合わせるように……今動かしちゃ病人のためにもよくなかうし、それから佃の方は手広いことには手広いが、人の出入りが劇はげしくて騒々しいから、それよりもこつちで当分店を休んだ方がよからうと思うから、そう言つてたとお上さんに言えつてことでした。明日は朝からおいでなざるそうです」

お光は領うなずいて、着物着更えに次の間へ入つた。雇い婆は二階へ上るし、小僧は食台ちやふだいを持って

洗濯元へ洗物に行くし、後には為さん一人残ったが、お光が帯を解く音がサヤサヤと襖越しに聞える。

「お上さん」と為さんは声をかける。

「何だね？」と襖の向うでお光の返事。

「お上さんはどこへ行ったんだって、佃の親方が聞いてましたぜ」

「……………」

「私や金さんてえ人のとこへ遊びにおいででしょうって、そう言つとききましたぜ」

「……………」

「ね、お上さん」

「……………」

答えがないので、為さんはそつと紙門を開けて座敷を覗くと、お光は不断着を被つたまままだ帯も結ばず、真白な足首現わに袴は開いて、片手に衣紋を抱えながらじつと立っている。

「為さん、お前さん本当にそんなことを言ったのかね？」

「ええ」と笑っている。

「言つたってかまわないけど…………どんな用事があるか分りもしないのに、遊びに行ったなんて、

なぜそんなよけいなことをお言いだね？」

「じゃ、やっぱり金さんのところへ？　へへへへそうだろうと思ってちよつと鎌かまかけたんで」

「まあ、人が悪いね？」

「へへへへ。何しろお楽しみで……」と為さんはジリジリいざり寄よつて来る。

「あれ、そっちへ行っておいでよ！　人が着物着更ふしえてるのに、不躰ふしつけ千万だね」

六

医者が今日日の暮までがどうもと小首をひねった危篤の新造は、注射の薬力に辛くも一縷の死命を支えている。夜は十二時一時と次第に深けわたる中に、妻のお光を始め、父の新五郎に弟夫婦、ほかに親内の者二人と雇い婆と、合わせて七人ズラリ枕元を囲んで、ただただ息を引き取るのを待つのであった。力ない病人の呼吸は一息ごとに弱って行つて、顔は刻々に死相を現わし來たるのを、一同涙の目に見つめたまま、誰一人口を利く者もない。一座は化石したようにしんとしてしまつて、鼻を去む音と、雇い婆が忍びやかに題目を称える声ばかり。

やがてかすかに病人の唇が動いたと思うと、乾いた目を見開いて、何か求むるもののように瞳を動かすのであった。

「水を上げましょうか？」とお光が耳元で訊ねると、病人はわずかに頷く。

で、水を含ますと、半死の新造は皴洒れた細い声をして、「お光……」と呼んだ。

「はい」と答えて、お光はまず涙を拭いてから、ランプを片手に自分の顔を差し寄せて、「私はこちらにいますよ、ね、分りましたか？」

「お前には世話をかけた……」

「またそんなことを……」とお光はハラハラ涙を零す。

「阿父さん……」

「阿父さんも皆お前の傍にいるよ。新造、寂しいか？」と新五郎は老眼を数瞬きながらいざり寄る。

「どうかお光の力になってやって……阿父さん、お光を頼みますよ……」

「いいとも！ お光のことは心配しねえでも、俺が引き受けてやるから安心しな」

「お光……」

「はい……」

「お前も阿父さんを便りにして……阿父さん、お光はまだ若いから、あなたが世話してやって……」

「よし！ それも承知してる、心配しねえでもいい」

「お光……」

「はい……」

「このあいだから阿父さんにも頼んどいたが、お前はまだ若いから……若い今のうちに片づく

がいいよ……」

「新さん！」とお光は身を顫ふるわして涙の中から叫んだ、「私や、私や、いつまでも新さんの女房でいますよ！」

乾ききつた新造の目には涙が見えた。舅しゅうとの新五郎も泣けば義理ある弟夫婦も泣き、一座は雇い婆に至るまで皆泣いたのである。それから間もなく、新造は息を引き取ったのであった。

* * *

越えて二日目、葬式は盛んに営まれて、喪主に立った若後家のお光の姿はいかに人々の哀れを引いたろう。会葬者の中には無論金之助もいたし、お仙親子も手伝いに来ていたのである。

で、葬式の済むまでは、ただワイワイと傍はたのやかましいのに、お光は悲しさも心細さも半ば紛まぎらされていたのであるが、寺から還もどって、舅の新五郎も一まず佃の家へ帰るし、親類親内みうちもそれぞれ退ひき取って独り新しい位牌いはいに向うと、この時始めて身も世もあらぬ寂しさを覚えたのである。雇い婆はこないだうちからの疲れがあるので、今日は宵よいの内から二階へ上って寝てしまし、小僧は小僧でこの二三日の睡ね不足に、店の火鉢の横おおいびきで大甗やいを掻かいている、時計の音と長火鉢の鉄瓶たきの沸たぎるのが耳立って、あたりはしんと真夜中のように。

新所帯の仏壇とてもないので、仏の位牌は座敷の床の間へ飾って、白布をかけた小机の上に、蠟燭ろうそく立てや香炉や花立てが供えられてある。お光はその前に坐って、影も薄そうなのシヨンボリした姿で、線香の煙の細々と立ち上るのをじつと眺めているところへ、若衆の為さんが湯から帰って来た。

「お上さん、お寂しゆうがしようね。私わつしにもどうかお線香せんこうを上げさしておくんなさい」

お光は黙って席を譲った。

為さんは小机の前にいざり寄って、線香を立て、鈴りんを鳴らして殊勝らしげに拝んだが、座を退すべると、「お寂しゆうがしようね？」と同じことを言う。

お光は諭たどえようのない嫌悪けんおの目色まなざしして、「言わなくなつて分つてらね」

「へへ、そうですかしら。私やまたどうかと思ひまして」

お光は横を向いて対手にならぬ。

為さんはその顔を覗くようにして、「お上さん、親方は何だそうですね、お上さんに二度目の亭主を持つように遺言しなすつたんだってね？」

「それがどうしたのさ？」

「どうもしやしません、親方もなかなか死際しにぎわまで料すいを利かしたもので……それじゃお上さん

も寢覚めがようがさね」

「寢覚めがいいの悪いのと、一体何のことだね？ 私にやさっぱり分らないよ」

「へへへ、そんなに恍惚とほなくたって、どうせそのうちに御披露があるんでしようから……」と言つて、為さんは少し膝を進めて、「ですが、お上さん、親方はそりゃ粹を利かして死んなすつたにしても、ね、前々からこういうわけだということが、例えば私の口からでも露はれたとしたら、佃の方の親方が黙つて承知はしめえでしょう」

「何を阿父さんが承知しないのさ？」

「何をって、金さんとお上さんと一緒になることでなくって、ほかにお前さん……」

「まあ！ 呆あきれもしない。いつ私が金さんと一緒になるって言つたね？」

「言わないたって、まあその見当でしょう？」

「馬鹿なことをお言い！」

為さんはわざと恍惚した顔をして、「へええ、じゃ私の推量は違いましたかね」とさらに膝の相触れるまで近づいて、「そう聞きゃ一つ物は相談だが、どうです？ お上さん、親方の遺言に私じゃ間に合いますか……」

「畜生！ 何言やがる!!」

お光はいきなり小机の上の香炉を取って、為さんの横ッ面へ叩きつけると、ヒラリ身を返して、そのまま表へ飛び出したのである。

* * *

飛び出して、その足ですぐ霊岸島の下田屋へ駆けつけたお光は、その晩否応なしに金之助を納得させて、お仙と仮盃だけでも急に揚げさせることにした。